

Dementia Behavior Disturbance Scaleと日常生活自立度(FIM), 認知症重症度(MMSE, HDS-R)の関係性について

About the relationship of Dementia Behavior Disturbance Scale, Functional Independence Measure, Mini-Mental State Examination, and Hasegawa Dementia Rating Scale-Revised

○千葉直之¹⁾, 遠藤有紗¹⁾, 遠藤晃祥²⁾, 坂口友康²⁾

1)桜台江仁会病院, 2)日本福祉リハビリテーション学院

Chiba N¹⁾, Endo A¹⁾, Endo T²⁾, SAKAGUCHI T²⁾

1)Sakuradai Koujinkai Hospital, 2)Nihon Welfare and Rehabilitation Institute,

keywords: DBDスケール, 認知重症度, 日常生活自立度

【はじめに】

Baumgarten (1990) は認知症に伴う行動障害は対象者と介護者にとって大きな負担になるとし、行動障害を定量的に評価するDementia Behavior Disturbance Scale (以下DBDスケール) を開発した。また、溝口らは日本語版DBDスケールを開発し、評価法の信頼性と妥当性ならびに介護者の有する負担感との関連について検討した。しかし、我々がリハビリテーション場面で認知症の重症度を評価するために用いるMini-Mental State Examination(以下MMSE), 改訂長谷川式簡易知能評価スケール(以下HDS-R)や日常生活自立度を評価するFunctional Independence Measure(以下FIM)との関係性は報告されていない。

そこで本研究の目的は認知症重症度に応じた行動障害や日常生活動作への介入に繋げるためにDBDスケールとMMSE, HDS-R, FIMの関係性を明らかにすることである。

【対象】

対象は、2011年4月～2012年3月まで当院に入院し、意識障害の無い104名の患者様である。内訳は男性30名、女性74名。年齢は平均 81.0 ± 7.9 歳、DBDスケールは平均 5.3 ± 6.3 点、FIMは 96.9 ± 27.0 点、MMSEは 19 ± 6.7 点、HDS-Rは 18 ± 7.9 点である。

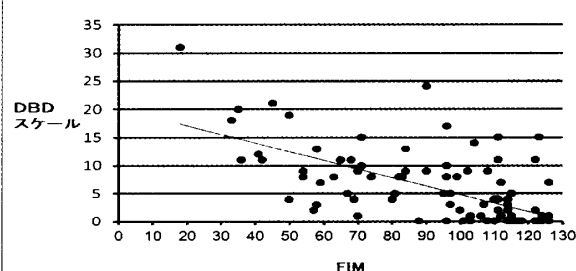
【方法】

行動障害はDBDスケール、認知症重症度はMMSEとHDS-R、日常生活自立度はFIMを評価尺度として用いた。各評価尺度は同時期にリハビリ職員(合計7名)が担当患者様に実施し、総得点を算出した。DBDスケールの総得点がFIM, MMSE, HDS-Rの各総得点との関係性を明らかにするためにSpearmanの順位相関係数を用いて検討した。

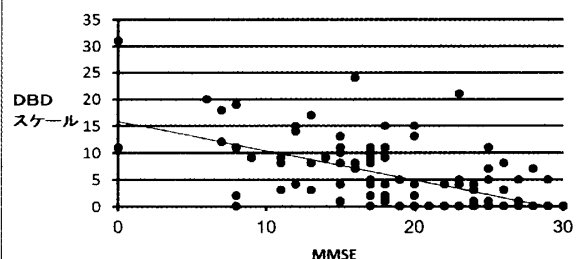
【結果】

DBDスケールとFIM, MMSEおよびHDS-Rの間には、各々 $r = -0.68$, $r = -0.60$, $r = -0.64$ だった。それぞれDBDスケールとの総得点と中等度の負の相関があると検証された。

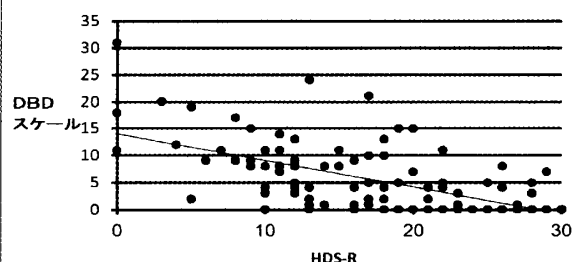
DBDスケールとFIM



DBDスケールとMMSE



DBDスケールとHDS-R



【考察】

本研究の結果よりDBDスケールはFIMとの間で相関が見られたため、DBDスケールの評価はADL障害としても捉えられると考えられる。同様にMMSEやHDS-Rとも相関がみられたため、認知症の重症度にあった行動障害とも考えられる。これらのことから、DBDスケールの評価は認知症の行動障害としてのADL障害を捉えることができると示唆された。今後はDBDスケールの各項目との関係性を明らかにすることにより、どのような行動障害がADLに影響するのか検討していく必要があると考えられる。